ドイツ通信 中田千穂子

続ベルリン音楽祭2019 オーケストラ・コンサートのハイライト

今年オーケストラ・コンサートでは、大小合わせて16のオーケストラによる競演が繰り広げられた。絶賛を博したのはペーター・エトヴェシュ指揮ベルリン・フィルのコンサート。エトヴェシュ作曲「アルハンブラ」ドイツ初演、同オーケストラが演奏するのは今回が初めてというクセナキスの大弦楽オーケストラの為の「シヤール」、そしてエドガル・ヴァレーズが100年前に作曲したオーケストラ編成140名による「アメリカ」では警笛サイレン、謎に満ちた南米の踊りによる響きの解放への迫力のある描写に圧倒された。ロンドン交響楽団12名と芸術監督サイモン・ラトル指揮オリヴィエ・メシアンの「彼方の閃光」や、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団と終身音楽監督ズービン・メータのお別れコンサートで演奏されたベルリオーズの「幻想交響曲」からも深い感動が得られた。現代作曲家オルガ・ノイヴェルトの「アエロータイプライターのバレエ」ではフルートのエマヌエル・パユの律動的でニュアンス豊かな演奏に魅了された。

デッサウ・アンハルト劇場で Ａ・デーガート演出 カンディンスキーのコンポジション「紫」初演

ヴァイマール共和制期の1919年に合理主義や機能主義を推進させる為の教育機関として、ドイツのヴァイマールに近代建築の巨匠ヴァルター・グロピウスにより創立されたバウハウス(1925年からデッサウに移転)の創立100周年を記念してその教育に携わっていた抽象画家の創始者ヴァシリー・カンディンスキーの舞台コンポジション「紫」がアリラ・ジーガート演出セバスチャン・ケナークネヒト指揮によりデッサウのアンハルト劇場で9月13日に初演された。

「紫」はカンデンスキーの最後の舞台コンポジションであり、色と響き踊りと動き音楽とドラマが空間の中で同等に作用するカンデンスキーが自ら書いた7景から成るテキストは〝壁が崩壊した〟で始まり〝しかし何も変わらない〟で終わる。舞台は男と女の関係の細胞となる「一つの部屋」で始まり、自己の発展と共に外に出て、世界を体験する。自由な空間を開き、偏見を排し、新たな始まりを見出す事。これがカンディンスキーの中心的なメッセージであった。

アリラ・ジーガートの演出では、男女、踊り手たち、乞食、児童合唱がスラップスティックのように踊り合い、歌い、即興画家がお目見えする。画面に超高層ビルや道端に人を描く。時に具象的で、時に不条理な万華鏡のような舞台であった。音楽：アリ・N・アスキン、舞台：モーリッツ・ニーチェ、衣装：マリー・ルイーゼ・シュトラント、上演時間90分、終演後、舞台上の回り舞台を囲んで檀状に設置されていた客席から観ていた240名の熱心な聴衆から熱狂的な喝采が浴びせられた。

金の子牛と踊りの場
（©Claudia Heysel）

カンマームジークザールにて、
スザンナ・メルッキ指揮ベルリン・フィル・カラヤン・アカデミー、
ソプラノ独唱ジュリエ・フラゼでグリセーの
「限界の克服の為の四つの歌」を演奏。（©Karcmarczyk）